

奪われた手桶の間

奪われた手桶の間(6)は、カルペスティーノの階と下から一番目のストリングコースの、ちょうど半分の高さに位置しています。これは、外部の階の仕切と塔内部床面の高さが、一致していないためです。14世紀初頭にはすでに、大聖堂の聖遺物や芸術品・宝物、市の記録書類が、この間の控室に保管されていました。広間の名は、ボローニャのサン・フェリーチェ通りにあった公営 井戸から、ザッポリーノの戦い(1325年)の最中に略奪してきた とされる、木と鉄の手桶に由来します。戦の卑劣な略奪品が、速 やかに市のシンボルとして、宝の様にまつられるようになり、ア レッサンドロ・タッソーニが1622年に書いた、同名詩によってその名が知れ渡りました。作品中に手桶の記述があります。

手桶はすぐに高い塔に収められ、太い鎖で石造りのアーチに吊り下げる、今に至るまで、あたかも栄冠の様に保存されているのだ。
(詩の一部訳)

現物は安全のため、市庁舎に保管されており、広間の中央には、複製の手桶が鎖で吊り下 げられています。広間全体がフレスコ画で飾られ、星空や入り口の鉄門のモチーフを投影 した、四角い網目のようなフレスコ画の効果もあって、全体が巨大な宝箱のような印象で す。鉄門が網目状のモチーフになっているのは、手桶をはっきり見せるためではないかと 考えられています。この広間の装飾は、ゴシック様式の特徴を見せ、1300年代のものとさ れています。この広間の重要性が装飾を通じて象徴的に分り、興味深いです。中世には皇 帝のマントを意味した、ヴェアの毛皮文様が使用されているのが、その好例です。

科学研究機器の間

鐘を鳴らすロープが達しているこの階 (5) から、建築物の内部がうかがえ ます。高さ約20メートルに及ぶ垂直の空洞内には、壁に取り付けられた階段の踊り場が、四角で柱と交差し、時には大窓と重なることもあるの を、計算に入れずに設計したように見られます。1898年には塔の傾斜を確 かめるために、尖塔から2本の鉛直を、勾配差の両端にそれぞれ吊り下 げて、計測が行われました。各階の床面には、計測水準点を示した、大理石 の小片が今も残されています。2003 年から傾斜の自動計測システムが採 用されました。内部空間の全長に、銅管が渡されているのが見えるはずで す。銅管内には電動振り子がしこまれていて、これは、時間の経過につれ 起きる、塔とドゥオーモの変位を測定する、総合的な計器の一部となっ ています。全てのセンサーが1台のコンピューターに接続し、専門技術者が 解析できるように、計測値を記録し保存しています。レンガ造りがむき出 しのままの内部の壁は、古代ローマのムティーナから奪った、古い建造物 の資材を再利用したもので、洪水の痕跡が厚い層となって、しみついたま でした。

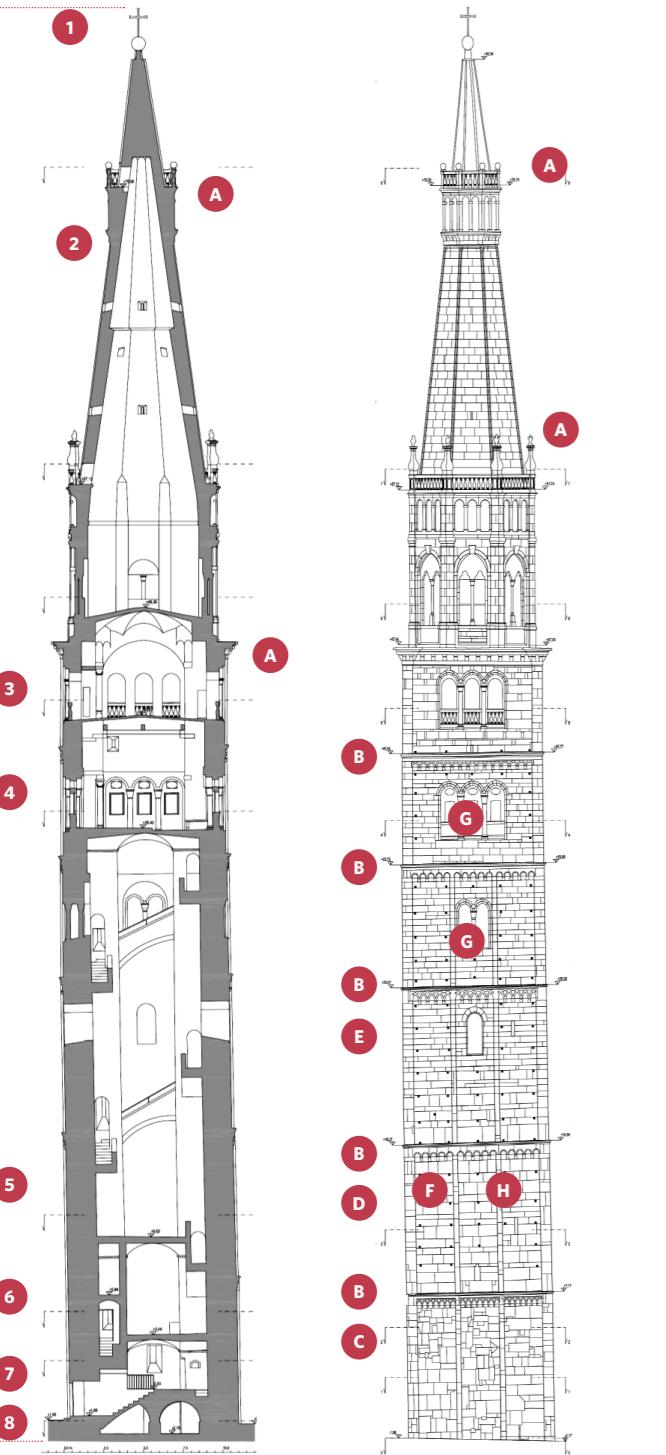
トッレス二の間

5 番目の階にあるトッレス二の間 (4) は、1184 年中に完成し、「トッレ サーニ」と呼ばれた市に仕える警護職の住居がありました。警護職の存在 は、1306年から1800 年代半ばまで記録に残っています。警護職は、市の 防衛のための見張り役であり、門の開閉を告げ、時を知らせるために鐘を 鳴らし、また有事の警告としてや、公式な祭典のためにも鐘を鳴らしまし た。16世紀末には、トッレス二の間の一部に公爵の居城方向への開口部 が設けられ、見晴らし台にも使われていました。優美な腰掛を二つ備え付 け、エステ家の鷲が掲げるモーダの紋章と、公爵の冠を描いたフレスコ画 で飾られました。冠は1700年代初頭に改めて描かれたものであろうとさ れています。北西の角にある柱には、鐘架層へと上るらせん階段が取り付 けられています。この空間内部には円柱が8本そびえ、塔の第二次建設期 (1180年頃)のものと思われる、興味深い柱頭が飾られています。柱頭の 2基は、精巧な彫刻が施されています。ダビデの柱頭(東の三連窓)には、音楽とダンスを題材にした彫刻が刻まれ、外壁第三ストリングコースの外角リリーフの数点に、同様の題材の彫刻が見られます。彫刻には、ひげ を生やし冠をいただいた男性が一人、ハープを爪弾いており、中世には芸 術の教祖とあがめられていました、ダビデ王とされています。裁判の柱頭(南 の三連窓)には、良き裁判官と悪しき裁判官の題材が彫られ、裁判官が判 決を言い渡すメント(ラテン語で思い出せの意)、つまり警告の場面を 表現していると思われます。これは、不公平でお金で判決を変える裁判官 は、自分の判断とは異なる判決を下すだろうという意味の言葉が、刻まれ ていることから分ります。彫刻で飾られた柱頭が、もともとこの塔の装飾 用であったのかは、確かにありませんが、一方が宗教的で、もう一方が 民主的な、現代にも通じる題材は、この塔の大聖堂の鐘楼であると同時に、市民の塔である二重の役割を、体現するかのようです。

ピラミッド型尖塔

八角形の最上部と高い尖塔(2) は、アンセルモ・ダ・カンピオーネの指揮の下、1319年に完成し、30メートルの高さの、単一の 層を形成しています。構造は中世のレンガ造りで、その先端部 は1890年から1896年の間に交換された石坂で覆われ、上部の 内壁に固定金具が配置されているのが見られます。鉛をかぶせ てある、最先端の部分だけが、最も古い時代の石板を残して います。内部の空間は漆喰塗りで、2008年から2009年にかけての 修復時に、過去の建築を記念する石碑より上部に、1300年代の 物と見られるフレスコ画の一部と、突端に濃い灰色の痕跡が発 見されました。往時はこの空間内部が全て、フレスコ画で覆わ れていたのでしょうか。外部に設けられた2つのバルコニーへと 続く、119段の見事ならせん階段は、1609 年に完成したもので す。壁の傾斜にそって上に伸び、28 メートルの高度差を登って います。階段の木材には、オーク、ポプラ、ヨーロッパトウヒが使用されています。この 階段は細い鉄板で支えられていましたが、傷みが激しく、近年新たに22枚の鉄板を、元の 古い構造を崩さず取り外しできるように組み合わせた、補修が行われました。外部 の特徴 的な8つの2連窓のうち、4つはふさがれています。記録によれば、1501年の地震で被っ た被害を補修するため、外部の石材全周に補強工事を行った後に、この階が 完成したとさ れています。構造を補強しつつ、傾斜したファサードの沈下を防ぐために、1500年代に金 属の支線が放射状に加えられ、尖塔のピラミッド型部分と、アーチ 形状始点の面には、古 い鎖が配されています。どちらも完 全な補修ではなく、このため2010年には、外部稜線に 补 強を2ヶ所加えています。





建築

モデナ市のシンボルであるギルランディーナ塔は、ドゥオーモ北側に隣接しています。その名は、尖塔先端を飾る大理石の欄干(伊語でギルランディーナ)が由来とされています(A)。建築初期については、当時の記録が不足しているため、どのように進展したのか確定されていません。2011年に完了した、最新の修復時に塔の分析が行われ、大聖堂と同時期の建設であることが確認されました。塔の建設は12世紀初頭に開始し、1319年に完成しています。

1500年代には八角形の最上層の修復が、そして1588年には尖塔をやや高くする形の、修復が行われました。その後も数度にわたる改修が続きました。

1609年にはピラミッド型尖塔(2)に木製階段が加えられ、1800年代末期には、塔に密接していた建造物が取り除かれ、そして1901年には、現在のランフランコ通りに面した入り口に当たる、開口部が設けられました(8)。

塔とドゥオーモは、1300年代のもので、1900年代初頭に修復された、二つのアーチでつながっています。

この塔はもともと、ドゥオーモの鐘楼として建築され、市民生活に重要な役割を担ってきました。鐘の音は時を告げ、市壁の開門時刻を知らせ、緊急や危険を報じる役目を持っていました。「トッレサーニ」と呼ばれる階(4)には、鐘守の住居がありました。また、その堅ろうな壁の内部にある、通称「聖具室」と呼ばれる間に、市の記録、(7)宝物(6)を収蔵していました。この塔は現在市の所有で、今でもドゥオーモのミサの時刻を知らせる、鐘(3)が鳴り響いています。

高さ約90メートルのギルランディーナの塔は、1辺が11メートルの正方形の基底から、50メートルの塔が伸び、その上に八角形の多面体とピラミッド型の尖塔があり、尖塔の先端には黄金の球と十字架が飾られています(1)。鐘架層床面の高さ(3)までの建材は、ローマ時代の旧跡から資材を再利用しており、レンガ造りの壁表面を、旧イストリア地域やトルコなどの産地から運ばせた、実に22種もの異なる自然石で仕上げています。鐘を収めた階と尖塔には、再利用ではなく、特に運ばせた資材を用いています。ギルランディーナ塔は地震による地盤沈下のため、南西に傾いており、その傾斜度が階によって異なるのは、建築の過程でそのつど、垂直性を修正してきたためです。

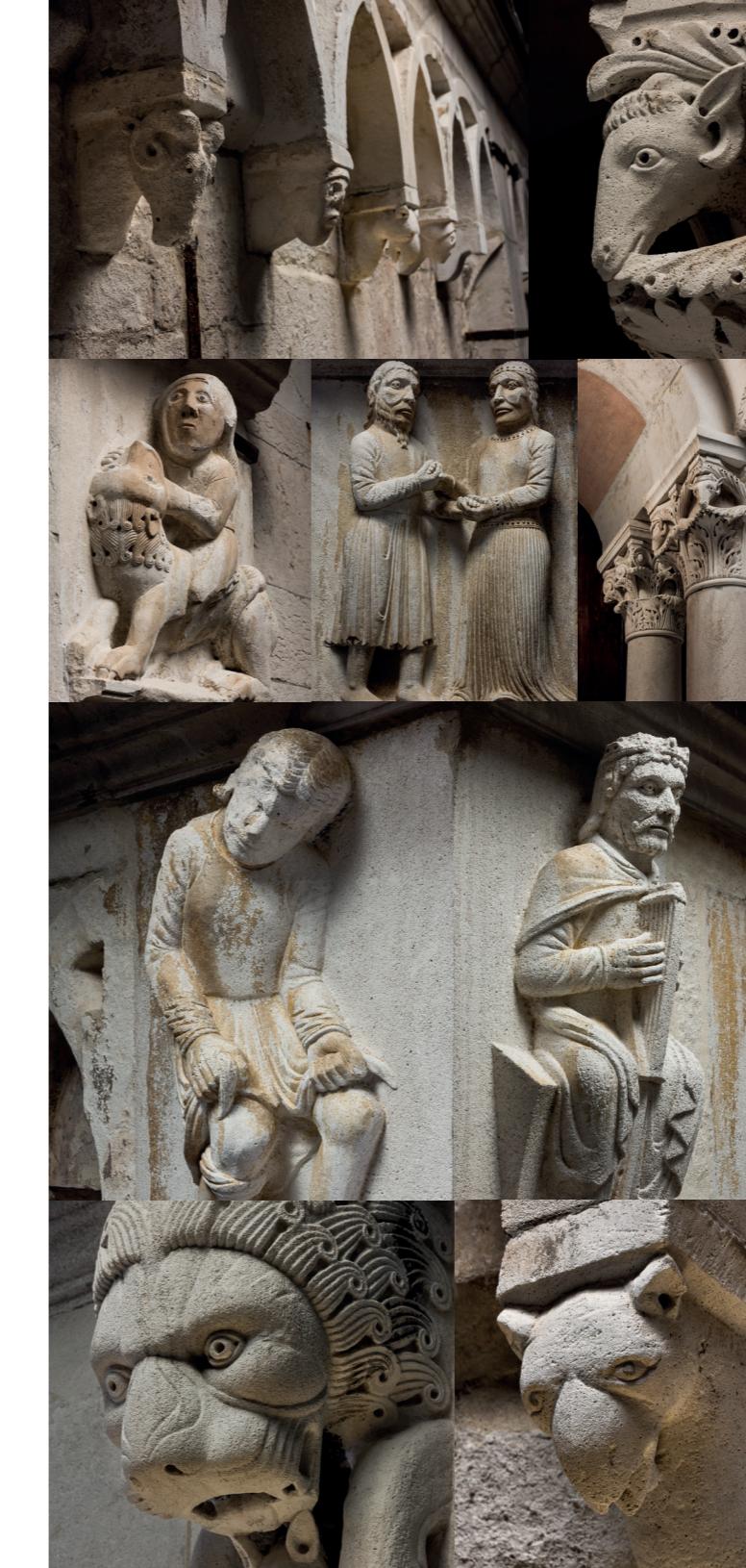
装飾物

塔は多数の装飾物で飾られ、細かいアーチを連ねたフレームと、コーベルテーブルが5層に横切っています(B)。このうち下から3層のフレーム角には、架空の生物(C)、動物(D)、人物(E)の彫刻が見られます。

2層目の東面には、植物や動物をモチーフにしたローマ時代のパネルが3枚使われており(F)、また3層目の南面にはメドゥーサの頭像が飾られています。2連窓と第5層目の3連窓は、精巧な柱頭で飾られています(G)。

19基の柱頭が塔の外部に、8基はトッレサーニの間に使われています。柱頭の意匠やコーベルには、人や動物の頭像が多く見られ、これらと第3のフレーム角の物は、12・13世紀にさかのぼる、ドゥオーモのポルタ・レッジヤや内陣仕切の支柱と、同種の意匠で彫刻されています。2011年には、下から2番目の東面アーチフレーム(H)の下から、赤い装飾の痕跡が発見されました。

1200年代前半の物と思われる、ユリと花が連なるモチーフは、カンピオーネ派の職人の作品である可能性が高く、中世期にこの塔がどのように装飾されていたかを理解するのに、非常に重要な発見でした。



www.visitmodena.it



インフォメーション:
IAT ツーリスト・インフォメーション
Piazza Grande 14
41121 Modena
+39 059 2032660
info@visitmodena.it
www.visitmodena.it

Torre Ghirlandina
torreghirlandina@comune.modena.it



torre.ghirlandina



torreghirlandina



Comune
di Modena

